

対馬に関するテーマ研究の試み

～総合講座 20 年を通して～

小池保則

国語科

要 旨

本校「総合講座」の一つ「国境の島『対馬』を体験する」は、生徒各自が研究テーマを選び、現地実習を中心に一年間「対馬」を学ぶ授業である。「総合講座」での学びの目的を明確にした上で、20 年に及ぶ生徒が選んだ研究テーマから「対馬で学ぶ」ことの意義と可能性について考察した。対馬に関する研究テーマを分析し、「対馬らしさ」について「民俗」「歴史」「生き物」という三つの要素を導いた。次に、生徒が選んだ研究テーマの変遷を分析し、「歴史・民俗」「漁業」などの伝統的な対馬の文化や産業への関心が、時代とともに「環境問題」「人口減少」といった現代の社会課題へと変化してきている傾向を明らかにした。さらに、対馬に関わる総合学習の実践から、校外学習における「民泊」の重要性を述べた。また、「学習指導要領」との対照から、高校教育における「総合的な探究」の授業と本講座との関連、及び探究学習に関する私見を示した。

キーワード：対馬、地域研究、民泊、探究学習

1 はじめに

20 数年前に何度か対馬を訪れたとき、対馬で過ごす時間とともに「対馬は教材の宝庫」という思いを強くした。それから生徒とともに「対馬で学ぶ」ことを始め、気がつけば生徒と対馬を訪れ続けて 20 年が過ぎた。

では、「対馬で学ぶ」意義とは何であろうか。その答えは、生徒たちが選んだ研究テーマにある。本報告では、本校生徒が関心を持った研究テーマを検討するにあたり、近年の高等学校における教育と「対馬での学び」を関連させて考えることを目的とする。

平成 30（2018）年告示による高等学校学習指導要領では、改訂のポイントとして「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」の必要性をあげており、高等学校においては、「総合的な学習」の名称を「総合的な探究の時間」として、探究活動の重要性を記している。高校教育における探究活動は、本校で実践してきた「総合講座」と一致する点が多い。

本校の「総合講座」は、平成 15（2003）年に始まり、「総合的な学習（探究）の時間」として 20 年以上続く選択制による授業である。令和 3（2021）年度までは高校 1 年生の必修単位として設定していたが、令和 4（2022）年度からは高校生対象の自由選択となり、より深く学べる探究学習の場として現在も継続している。その「総合講座」の一つに「国境の島『対馬』を体験する」がある。

本講座は、平成 16（2004）年度から令和 6（2024）年度までの間に 20 回開講し、現地での実習を軸とした総合学習を実践し続けてきた。その歴史は平成 16（2004）年度に、加藤十握教諭と一緒に本講座を開講したことに始まる。その後十年以上に及び、加藤教諭とともに内容をより充実させるための更新を続け、都合 20 年以上継続してきた講座である。

2-1 総合講座「国境の島『対馬』を体験する」の内容

〈講座の目的〉～武蔵高校「総合講座」の募集要項（2024 年度）から～

対馬は「課題先進地域」といわれる。過疎や高齢化の問題だけでなく自然環境の変化によって危機的な状況の集落がある。そこには日本の将来の縮図があり、現代日本の抱えるさまざまな課題を見ることができる。東京を中心とした発展ありきの未来志向ばかりでは今後の日本が成り立たないことはもはや自明である。SDGs を視野に入れながら持続可能な社会をどう描くのか。本講座では、「中央」から離れて「国境の島」へと足を運び、その空気を呼吸し、外からの視線を交えて自らの足下を見つめ直すとともに、これからの社会について考えることを目的とする。

〈講座の歴史と内容〉～『対馬体験記・対馬研究レポート』謝辞（2024 年度版）から～

対馬での実習は「国境の島『対馬』を体験する」との名称で設けられた私立武蔵高等学校の授業における一環としてある。2004 年度から開講、2024 年で 21 年目 20 回を迎えた（2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大のため中止）。現時点において対馬実習に参加した生徒は 142 名となった。

高校生対象の授業である総合講座は、毎年、各教員が設けた講座の中から生徒たちが 1 講座を選択し、1 年にわたって教科教育の枠を超えて学問の基礎を身につけるために用意される。本講座では、長崎県対馬市における夏期実習を軸に、1 年間を通して対馬についての研究を行ってきた。

〈1 年間の授業スケジュール〉

総合講座「国境の島『対馬』を体験する」の年間授業スケジュールは次の通りである。

- 4 月 講座への募集開始とオリエンテーション、受講者決定（定員 6 名）
- 5 月 対馬の歴史を学ぶ（司馬遼太郎『街道を行く 壱岐・対馬の道』等の資料）
- 6 月 対馬に関する講義と発表 各自の研究テーマを決める

→関心のある問題を各自が発表し、受講者間で共有する

対馬での「聞き取り調査」「現地での学習内容」のスケジュールを組むために、対馬の方々と相談してテーマ研究のためのコーディネートをお願いする。対馬市役所、対馬観光物産協会、対馬グリーン・ブルーツーリズム協会のほか、民泊でお世話になる方々など、現地関係者の方々に協力を依頼。同時に、民泊先での聞き取り調査の計画を立てる。

7月 現地実習のために「現地での質問事項」をまとめ、「実習行程表」を作成する。

8月 対馬実習実施 上旬または下旬（お盆の期間を除く）

9月 実習の成果をまとめ、「対馬体験記」の作成作業に入る。

同時進行で、実習での調査や体験を元に、各自の研究テーマを掘り下げる。

年度により受講者間でのテーマ発表やプレゼンを実施。

10月～12月 「対馬体験記」の編集・完成と「対馬研究レポート」の作成。

2月下旬 「対馬研究レポート」の提出。

3月 授業の評価と総合講座発表会

全体の構成を「事前学習→現地実習→研究報告書作成」の3段階とした。「対馬体験記」「対馬研究レポート」については、校内で閲覧するだけでなく、広く対馬でお世話になった方々にも読んでいただくこととした。

なお、記念祭（文化祭）での対馬に関するポスター発表、及び、校内での総合講座合同発表会への参加など、随時、発表の場を設けた。

2-2 総合講座「国境の島『対馬』を体験する」での学び 〈 〉に学びの目的を示す

- (1) 〈主体的な学び〉 対馬に関するテーマを自分で考え、自分なりの視点で研究すること
- (2) 〈対話的な学び〉 対馬に関する学びを受講者全員で共有すること
- (3) 〈深い学び〉 学校での文献調査とともに、現地での実習を踏まえて研究すること
- (4) 〈自己の在り方生き方を考える学び〉 現地実習は「民泊」を主体に実施すること
- (5) 〈課題を発見し解決していく資質・能力を育成する学び〉 現地実習では「対話と交流」を常に心がけて生活し、調査活動を行うこと

(解説)

(1) 生徒が選ぶ「課題」については、あえて課題とせずに、対馬に関する「テーマ」を選ぶことを指導した。「課題」とすると、現状の問題点というイメージが先行して選択の幅が狭くなるためである。これは、探究学習の現場で感じた用語使用の問題点である。

(2) 1学期の授業は「ゼミ形式」で行う。受講者は対馬の歴史、自然と生活、現代の課題などについて学んだあと、自分が選んだテーマについて発表する。質疑応答を通して、受講者全員でテーマを共有し、自身のテーマを掘り下げることに繋げる。

テーマの共有によって、自身の研究の幅を広げることと、より深く探究することを目指した。2学期は「対馬体験記」の執筆と編集（編集長の生徒がまとめる）を行い、3学期に「研究レポート」を提出し、一連の学習を評価の対象とした。

（3）現地実習に参加することを受講の条件とした。自分の目で見て自分の耳で聞く、そして、現地での生活を体験することで生きた調査研究が出来る。さらに、現地での実習によりテーマ研究の掘り下げが期待出来る。

（4）「民泊」による実習の意義は計り知れない。民泊は、もてなす側の一方通行ではない。受け入れ先の方から「民泊として、実際に受け入れると、料理だけでなく何にでも感動してくれる。今まで当たり前やってきたことだが、自分や地域に誇りが持てるようになった」という話を聞いた。「民泊」体験は、驚きや感動によって、生徒たちにとっても、自己を見つめ直す機会に繋がる。

（5）「民泊」を体験する側の生徒は、毎年「対話と交流」により、多くの収穫を得ている。主体的に地域に関わることで、協働して取り組む姿勢や交流の楽しさを実感する。対馬に限らず、関係人口を増やし広げていくことは、地域活性化につながり、過疎や少子化、人口減少などの課題解決にも関わる。地域研究は現場を体験することが必須で、生徒たちの課題解決に取り組む姿勢を刺激し、資質・能力の育成を助けることになると考えている。

また、「考えたこと」だけでなく、「見たこと」「聞いたこと」を整理して思考を深め、「表現する」力を育成することも探究学習における大切な学びであると考え（教室でのプレゼンや「体験記」「研究レポート」の作成、など）。

参考 対馬での生徒の活動報告とテーマ研究を収める『対馬体験記』



2024 年度まで 20 冊発行

3-1 20 年間の対馬に関する研究テーマ一覧（武蔵高校 1 年生）

No	年度	研究テーマ	No	年度	研究テーマ	No	年度	研究テーマ
1	2004	対州馬	51	2011	真珠養殖	101	2018	対馬島内の交通
2	(81期)	養蜂	52	(88期)	石屋根倉庫	102	(95期)	朝鮮出兵の山城
3		対馬の史跡	53		豆酸の歴史(交易)	103		豆酸の赤米神事
4		炭焼き	54		豆酸の海士	104		対馬の馬と人
5		地鶏	55		焼畑(木庭作)	105	2019	島おこしと地域活性化
6		トビウオ漁	56		対馬の生きもの	106	(96期)	対馬の地名
7		昔の漁法	57		陶山訥庵と農業	107		対馬の製塩業
8		赤米神事	58	2012	無形文化財の収集	108		対馬の漂着ゴミ
9	2005	牛馬	59	(89期)	天道信仰	109		対馬の城郭(金田城)
10	(82期)	炭焼き	60		対馬の住居	110		対馬とイノシシ、シカ
11		芋料理	61		対馬の古代性	111		対馬の固有種(昆虫)
12		やまねこと自然	62		曲の漁業	2020(97期)実施せず		
13		真珠養殖	63		漂着ゴミ	112	2021.12	対馬要塞と東京湾要塞
14		養蜂	64		対州そば	113	(98期)	赤米神事
15		史跡	65		朝鮮通信使	114		オソロシドコロと天道信仰
16	2006	やまねこ	66		各集落の特徴	115		ヤマネコ保護と有機農業
17	(83期)	歴史	67		ヤマネコの保護活動	116		孝行芋、いも料理
18		製塩	68		農業史(焼畑)	117		離島振興(養殖クロマグロ)
19		木庭作	69		伊奈の捕鯨	118	2022	ツシマヤマネコの保護
20		鉱害	70	2013	ツシマジカ	119	(99期)	漁業の現状と磯焼け
21		海藻	71	(90期)	神仏への供え物	120		対州馬について
22		民俗伝承	72		対馬の植物	121		海上交通の変遷(渡海船)
23		キリシタン	73		「卒土(そと)」について	122		対馬高校(国際文化交流科)
24	2007	やまねこ	74		対馬の伝統的な養蜂	123		信仰・神事(厳原みなと祭り)
25	(84期)	砲台	75	2014	亀ト	▽		防衛史(白村江から自衛隊)
26		伝説	76	(91期)	対馬の河童伝説	124	2023	対馬の外交史
27		椎茸	77		対馬の蜂使いの歴史と特徴	125	(100期)	対馬の信仰・習俗
28		朝鮮通信使	78		対馬の漁業—海女について	126		対馬と韓国
29		河童	79		対馬における漂着ゴミ	127		朝鮮半島との交易史
30		芋栽培	80		対馬の城郭	128		養蜂(蜂洞)
31		木庭作	81		ツシマヤマネコの保護活動	129	2024	天道信仰
32		祭祀伝承	82	2015	倭館(貿易)	130	(101期)	金田城
33		環境	83	(92期)	磯焼け	131		人口減少
34	2008	やまねこ	84		海藻の利用(藻小屋)	132		若者の進路
35	(85期)	陶山訥庵	85		石屋根倉庫	133		日本人観光客
36		孝行芋	86		日韓文化の違い	134		離島・対馬の物価
37		観光と韓国	87		ヤマネコ保護活動	135		海洋ゴミ
38	2009	牛馬	88		猪鹿追詰と現代の対策	136		人口減少
39	(86期)	韓国問題	89	2016	倭寇と海の民	137		観光事業
40		ブリ飼付け漁法	90	(93期)	対馬のクワガタムシ	138		人口問題、雇用創出
41		漂着ゴミ	91		対州そばと木庭作	139		磯焼け問題
42		養殖マグロ	92		対馬の民謡「今里こんたん」	140		海洋ゴミ
43		真珠養殖	93	2017	対馬の人口問題	141		海洋ゴミ
44	2010	要塞(砲台)	94	(94期)	対馬と韓国	142		磯焼けの現状と藻場再生
45	(87期)	観光業と韓国	95		対馬の安徳天皇伝説			
46		天道法師	96		万関橋	※ ▽は実習不参加者		
47		イカ漁	97		砲台の歴史			
48		漂着ゴミ	98		対馬の産業(炭焼き)			
49		採藻	99		ツシマヤマネコ保護			
50		採貝	100		郷土料理			

(注)「〇〇期」は、武蔵高校での卒業期

3-2 分析 1 研究テーマ一覧から～生徒は対馬の何に問題意識を持つか～

生徒が選んだテーマの件数について、多い順に挙げる(次ページグラフ参照)。

18 件 民俗・伝承 赤米神事、天道信仰、亀ト、河童伝説、今里こんたんなど

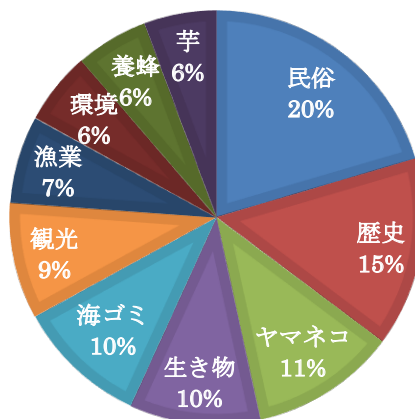
13 件 歴史・史跡 金田城、倭寇、倭館、交易史、猪鹿追詰など

10 件 ツシマヤマネコ保護 保護活動、順化ステーション、やまねこ米など

- 9 件 生き物 対州馬、あか牛、イノシシ、ツシマジカ、昆虫、植物、鳥獣対策含む
- 8 件 海洋ゴミ 漂着ゴミ、海洋プラスチック、処理問題含む
- 8 件 観光と韓国人観光客 観光事業、日本人観光客含む
- 6 件 漁業 漁法（トビウオ流し網漁、ブリの飼付け漁など）含む
- 5 件 環境問題 磯焼け、藻場再生など
- 5 件 養蜂 蜂洞、蜂使いなど、産業としての養蜂
- 5 件 芋料理 保存法、「ろくべえ」、郷土料理含む

研究テーマ（5件以上）

■ 民俗 ■ 歴史 ■ ヤマネコ ■ 生き物 ■ 海ゴミ ■ 観光 ■ 漁業 ■ 環境 ■ 養蜂 ■ 芋



以下、4 件以下のテーマを記す。

- 4 件 木庭作（焼畑）、砲台（要塞）、城郭、人口減少問題
- 3 件 炭焼き、真珠養殖、海藻（藻小屋、藻場再生含む）、養殖マグロ
- 2 件 石屋根、朝鮮通信使、製塩、海士・海女、対州そば、陶山訥庵、住居（万関橋）、交通（渡海船）、教育（対馬の高校の進路）

他に、1 件だが、個性的な研究テーマもある。参考として以下に載せる。

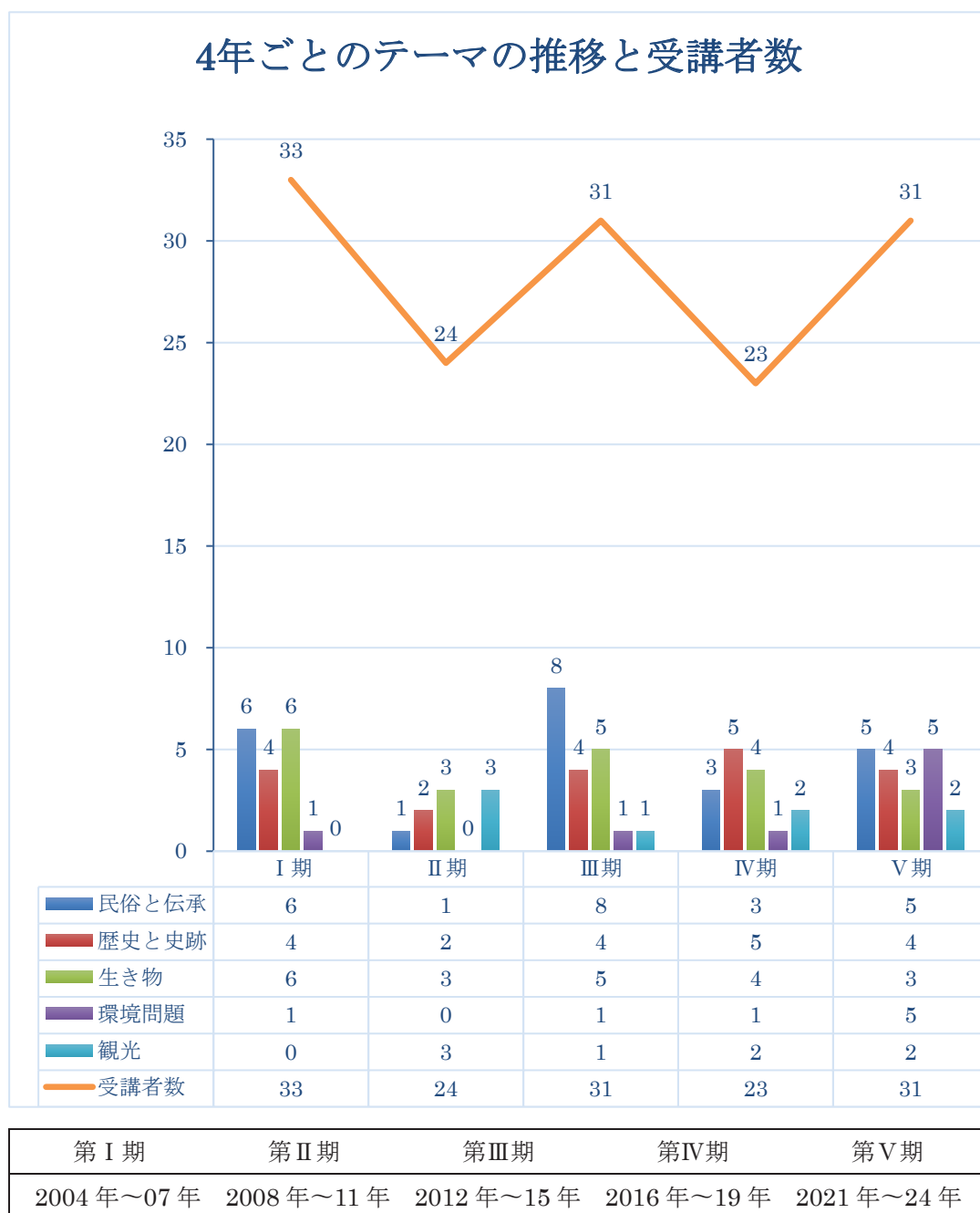
捕鯨 地鶏 採貝 採藻 椎茸栽培 無形文化財（盆踊り）、集落の特徴
 鉱害問題 地名 離島・対馬の物価

ただし、ツシマヤマネコの保護と環境問題とは関連したテーマであり、観光事業と韓国との関係、産業と人口減少問題は重なる点があるなど、分類の境界が曖昧なテーマもある。場合によっては、どちらかに限って分類しているケースがあることを断っておく。

こうして研究テーマを抽出してみると、対馬が探究学習における「教材の宝庫」であることに改めて気づかされる。

3-3 分析 2 研究テーマ一覧～20 年の歴史から見えるもの～

次のグラフは、20 年分の研究テーマ及び受講者数の推移を、4 年ごとの 5 期に分けて示したものである。



テーマ 1：対馬の民俗と伝承

テーマ 2：対馬の歴史と史跡

テーマ 3：対馬の生き物（ツシマヤマネコ・鳥獣対策を含む、養蜂は含まない）

テーマ 4：対馬の環境問題（海洋ゴミ、磯焼け）

テーマ 5：対馬の観光産業と韓国人観光客（韓国との関係含む）

（解説）

生徒の関心が高い 5 つのテーマについて、類似したテーマをまとめた上で時期による変遷を分析したい。理由は、生徒が関心を示すテーマの推移を見ることで、テーマ研究の時期ごとの傾向が読み取れると判断したためである。

（分析）

（1）受講者数は隔年で増減している

（2）「民俗」「歴史」と「生き物」への関心は受講者数に関わらず一定の関心を得ている

（3）「環境問題」への関心は年を追うごとに高まっている

（4）「観光」「韓国との関係」をテーマとする生徒はそれほど伸びていない

（5）第 V 期において「環境問題」への関心が、「民俗」「歴史」と同程度まで高まっている

（考察）

生徒が関心を示す研究テーマは時代と共に変化し、世界情勢や社会問題への関心と深く関わる。受講者数の増減は担当者と学年の生徒との関係による所も多い。講座の担当者が選択する学年の生徒と授業などで関わる機会が多いと、「あの先生の講座だから」と関心を持つ傾向がある。受講者数の増減が隔年現象となっている一因だが、受講者数が一定していない点は今後の講座運営の課題となるだろう。

長い歴史を持ち、古代の習俗が残る対馬ゆえに、民俗と信仰、歴史と史跡や文化への関心がどの時期もあるというデータは対馬の特色をよく示している。特に、天道信仰は 4 件を数え、関心が高いことがわかる。また、歴史ある島ゆえに固有の生物が多く生き残っているため、対馬固有種への関心が 8 件あり、生き物への関心が継続して見られるのも対馬の特色と言えるだろう。

環境問題への関心が時代とともに高まっていることは、気候変動や SDGs の影響による傾向であるが、加えて全国的な環境の急激な変化という現状、及び、対馬における行政・民間を含めた環境問題への積極的な取り組みへの評価とも関連すると考えられる。

平成 30（2018）年に 41 万人を数えた韓国人観光客は、令和元（2019）年からの日韓関係悪化により激減した。さらに、令和 2（2020）年からは新型コロナウイルス感染拡大のため日韓航路が停止となった。それにも関わらず、観光や韓国人観光客をテーマとする生徒の数が一定数を維持している点は注目したい。対馬は「国境の島」として、観光事業への

関心は常にあると言えるだろう。

対馬の「食べ物」への関心が一定数あるのは、遠く離れた土地ゆえに「食」への関心を呼びやすいためであろう。観光業においても「土地と食との結びつき」は常に考えるべきテーマである。中でも、「いも」の保存法と料理（せんだんご、ろくべえ）に関心を持つ生徒がいるのは、対馬が歩んできた「孝行いも（サツマイモ）」の歴史が認知されていることを示している。

また、近年話題となるテーマの初出から、社会課題の推移が見えてくる。例えば、「環境問題」は平成 19（2007）年に初出で見えるが、平成 21（2009）年以降に増えてくる「海洋ゴミ問題」との関連が考えられる。「海洋ゴミ」（漂着ゴミ）問題は、平成 21（2009）年以降、平成 22（2010）年、平成 24（2012）年、平成 26（2014）年、令和元（2019）年と毎年のようにテーマとして選ばれている。それと関連するように、平成 27（2015）年には「磯焼け」が見え、令和 4（2022）年、令和 6（2024）年のテーマへと続いている。「人口問題」は平成 5（1993）年が初出だが、令和元（2019）年以降の「地域活性化」「雇用創出」へとつながる流れが確認できる。

3-4 研究テーマと対馬における民泊実習

対馬での実習は開講当初から「民泊」を必須として実施してきた。以下、校外での地域研究における民泊について、20 年の実習を通して見聞したこと、考えたことを記す。

(1) 民泊体験のキーワードは「日常」

民泊において、受け入れ先には「特別な対応をせずに日常を体験させてほしい」とお願いしている。その土地に生きている方々のありのままを見て、一緒に体験することが生徒たちの研究テーマにも関わる大切な経験となる。

対馬で一晩お話を聞いたあと、「僕は研究レポートを白紙に戻して一から考え直します」と言ってきた生徒がいた。対馬の人々の韓国人観光客に対する意識について話を聞いたそうだが、東京で考えていたマスコミ報道による情報に対して、現地で聞いた生の声とでは 180 度違うところがあり、自分の考えが狭くて浅かったことに気づいたと話してくれた。こうした、対馬の方々の日常が生徒の日常を考え直すきっかけとなった例は枚挙に暇がない。

(2) 民泊は「相互作用の効果」がある

受け入れ先との交流が高校生たちにとって貴重な経験となり、特に、島での体験が東京での生活にまで影響することは当然のことである。東京の高校生にとって、対馬での体験は「異文化」にふれることとなる。一方で、受け入れるご家庭にとっても民泊は意味のあることだと伺ったことがある。

ある受け入れ先の方から「民泊は夢であったが、やってみると楽しいことが多い。喜びとともに私たちに誇りを与えてくれる」というお話を聞いた。高校生たちは民泊を体験すると、「あの家のお父さんはすごい、何でも手作りする」「お母さんの育てた野菜や作ってくれた料理がとてもおいしくて、東京では食べたことがないほどだった」などの感想をよく聞く。実際に私もその通りだと思うので、受け入れ先の方々には是非とも誇りを感じてほしいと思ってお願いしてきた。

(3) 「3泊4日の法則」による教育的効果

教育旅行の関係者から「3泊4日の法則」という言葉を聞いたことがある。2泊3日のホームステイの場合、1日目は到着日、3日目は帰宅日となるため、民泊先のご家庭との交流は2日目が主となる。このため、1日「良いお客さん」で過ごせば「素の自分」を出さずに過ごしてしまう。これが3泊4日となると。中2日間を一緒に過ごすこととなり、飾らない自分を見せることとなって、深い交流につながることが多い。「3泊以上になると民泊の教育効果は倍増する」と常に実感している。

この「3泊4日」の効果を20年前から可能なかぎり実践してきた。特に、対馬のような生徒たちの日常と異なる場面が多い地域では、より交流を深め、広げるために「3泊4日」以上の民泊体験が必要であると考えている。

(4) 研究テーマと対馬における民泊実習

かつて「生徒の対馬での印象は民泊8割」という言い方にも接したことがある。対馬のある旅行者の方から聞いたお話では、「どんなに多くの学習や体験プログラムを用意しても、子どもたちの対馬での印象としては、民泊の体験が一番の思い出として残る」というお話を聞いた。確かに、私が生徒から聞く話でも民泊先の話が多くを占めると常々感じている。

しかし、民泊体験は、対馬での独立したプログラムではない、と捉えている。民泊体験で現地の空気を感じたからこそテーマ研究の深まりがあり、実習の意味があると考えている。実際に、「受け入れ先でのインタビューは対話を深め、主体的な学びを促す」ことを、実習を重ねる度に実感している。

4-1 『学習指導要領』『総合的な探究の時間』と「総合講座」の関係性

2-2「総合講座での学び」に記した対馬での学びの内容と、学習指導要領が示す「探究学習」での学びとの関連について考察したい。

〈「総合的な探究の時間」での学び〉とは

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説「総合的な探究の時間」編（同年7月）「改訂の趣旨」によると、「主体的・対話的で深い学び」について以下の記述がある。

・探究的な学習を実現するため、「1 課題の設定 →2 情報の収集→3 整理・分析→4 まとめ・表現」の探究のプロセスを明示し、学習活動を発展的に繰り返していくことを重視してきた、とした上で以下の趣旨を示している。

- ・名称を「総合的な探究の時間」に変更
- ・各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統合的に働かせること
- ・総合的な探究の時間の目標は、「探究の見方・考え方」を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目指す

(解説)

「総合的な学習」からの発展として、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力」の育成を目標とする、とある。自分の立ち位置（今とこれから）を考えることが解説されている。

【総合講座での学びとの関係性】総合講座「国境の島『対馬』を体験する」では、「自らの足下を見つめ直すとともに、これからの社会について考える」ことを主たる目標としている。自分の立ち位置を見直すために、「国境」としての対馬を考え、現時点での自分を考えることは探究活動の意義として重要と考えている。

〈「総合的な探究の時間」の授業として、他教科・科目において行われる探究との違い〉

- 1 特定の教科・科目等に留まらず、横断的・総合的な点
- 2 複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究するという点
- 3 この時間における学習活動が、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点

【「総合講座」で目指すもの】以上の点を踏まえた上で、他教科・科目での探究とは異なる本校「総合講座」の目指す方向性があると考えている。

4-2 学習指導要領が目指す「三つの力」に対する私見

平成 30（2018）年 3 月 30 日告示による高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間」編「目標」では、以下の「三つの力」（総合的な探究の時間を通して育成することを目指す資質・能力）が示されている。

- (1) 知識及び技能
- (2) 思考力，判断力，表現力等
- (3) 学びに向かう力，人間性等

〔私見 1〕総合講座の授業と実習で重要視しているのは、(2) である

(解説) (2)「思考力、判断力、表現力等」に対応するものとして、学習指導要領では、実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するという、探究の過程において発揮される力を示している(下線は筆者)。問いや課題は、生徒がもっている知識や経験だけからは生まれないこともある。そこで、実社会や実生活と実際に関わることを求めている。その中で、過去と比べて現在に問題があること、他の場所と比べてこの場所には問題があること、自己の常識に照らして違和感を感じる問題があることなどを発見し、それが問題意識となり、自己との関わりの中で課題につながっていく。こうして、問いや課題が定まると、探究がスタートする。

下線部にある「自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する」という学習のプロセスが、「総合講座」での実践と一致する探究学習のあり方として重視すべき内容と考えている。

【私見2】民泊を軸とする現地実習では、(3)で示される「学びに向かう力」の育成を目指す。主体的に受け入れ先の方々に関わることで、驚きや感動とともに多くの気づきを得ることがよくある。そこから、新たな価値の創造とよりよい社会の実現を目指していくことを目標としてきた。

(解説) (3)「学びに向かう力、人間性等」について、学習指導要領に「探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う」ことを目指す、とある(下線は筆者)。

5 ままとめと今後の展望

対馬に関する探究学習の研究テーマとして、生徒の関心を集める特徴を列举し、確認しておきたい。

生徒が選んだ研究テーマの分析によれば、「民俗」「歴史」「ツシマヤマネコ」が長い間変わらず関心を得ている。対馬に関わる探究学習においては、この「対馬らしさ」を維持しながら、現代社会の課題にも積極的に取り組む姿勢が大切であろう。

対馬は日本本土よりも外国に近い国境の島である。それゆえに固有の歴史を持つが、一方で、海外との交流における入り口となってきた。国境の島であることは、必然的に国防上重要視されてきた歴史がある。過去の戦争において、山城や要塞として整備された歴史があり、今なお残る城郭や砲台などの遺跡の意味を問うことは歴史を学ぶ上で重要である。国境の島として、常に他国の脅威に接して来たことを忘れてはならない。

他にも、本州から遠い島ゆえに固有の自然と習俗が残っているという特徴がある。神仏への信仰や自然を崇拝する習慣が今も残っていることと現代の生活との関わりを考えるこ

とは、日本人としてあることの存在を確かめることに通じる。

「対馬市観光振興推進計画」(令和 4 年 3 月、対馬市)にある以下の提言は示唆的である。

「国連の開発目標として掲げられた SDGs が全世界的な関心テーマとなり、SDGs を学ぶツアーが全国で増えつつあります。対馬は、海洋プラスチックごみや磯焼け、鳥獣対策、日韓国交問題など、国境の島ならではの課題を抱えていますが、逆にその課題こそが持続可能な社会に向けた最先端の学びの場を提供できる可能性を秘めています。」(下線は筆者)

「国境の島『対馬』を体験する」の授業を通して、探究学習における課題発見の動機づけと現地での実習が大切と考えて来た。現代社会を生きるための課題だけでなく、持続可能な社会を作り上げていくために、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養うことも必要であろう。これからの社会を担う高校生たちにとって、対馬の抱える過去・現在・未来の問題を発見し、社会課題の解決策を考え、最適解を追求していくことの意味は大きい。

一方で、これから先、デジタル社会や生成 AI の発展により、人間としてのあり方を問われることが多くなり、同時に、日本という国の行く末を常に考えざるを得ない社会となるだろう。さまざまな問題には正解がなく、曖昧な最適解や納得解が求められる時代が来るかも知れない。だからこそ、無理に解を求めるのではなく、問題意識とそれを思考するプロセスを共有し合意点を認め合うことが大切になってくるのではないかと思う。

国境の島に立ちながら、これからの日本や世界を考える。対馬の方々と交流を深めながら自らの生活を見直す。さまざまな地域に足を運び、呼吸した空気を忘れずに、大切にしながら、今後もこうした校外学習としての「総合講座」の試みが、より多くの地域を対象として、より多くの講座を通して実践されていくことを思うばかりである。

〔参考資料〕

- ・「高等学校学習指導要領」(平成 30 年告示)解説
- ・「総合的な探究の時間編」(平成 30 年 7 月文部科学省初等中等教育局)
- ・「対馬市観光振興推進計画」(令和 4 年 3 月対馬市観光交流商工部商工課)

〔謝辞〕20 年以上前から現在まで、本校での対馬実習を支えて下さったすべての方々にこの場を借りて御礼と感謝を申し上げます。特に、対馬の方々のご理解とご協力がなければ実習の継続は成り立たなかったと思います。

対馬の皆さん、本当にありがとうございました。